

纏足をほどこした女たち

星野 幸代

はじめに

1990年代に、白日のもと母親の纏足^{てんそく}をほどいた足をつぶさに観察した男性は、次のように描写している。

正面から見ると、ケロイドのように皮と肉が腐って脱落した、変形し変色した気味の悪い肉塊が現れている。反り返った足指は一本だけ、その上に爪がかろうじて識別出来る。そのほかはすべてぶよぶよした肉塊だ。

内側から見ると、足指と足の踵は中から折れてぴったりあわさり、柔らかい肉がついて、アーチ型の曲線を形成している。かかとはふくらみ、足の裏は見えず、足の甲は凸型に湾曲している。その全長は自然に発育した場合の半分にも及ばず、足全体がほとんどいびつな三角形をなしている。

最も恐ろしいのは正面から足の裏を見ることだ。それは人間の足の原型を全く失った荒唐無稽な図である。変形したかかとをのぞけば、滑らかな足の裏はすこしもない。四本の足指は長いのも短いのも内側に折れ曲がり、親指を軸とする土踏まずを取り囲み、足指の表が足の裏と一体化し、完全にねじ曲がって足の裏にぴったりくっついている¹⁾。

現代明るみに出た纏足がいかにグロテスクなものであっても、これが中国で容貌の美醜を凌ぐ女性美の基準として千年にも渡って続いたのは事実である。

今日纏足については、その作り方や鑑賞法、宴での遊び方、閨房術との関係などがエロティックな関心を呼んでいるほか、中国の近代化ないし近代中国における女性解放を語るに、纏足の廃止が不可欠の話題となっている²⁾。なぜこれほどまでに纏足が普及し、延々と維持されたのか。坂元ひろ子氏は一般的に言われるように“家父長制にもとづく男性／女性軸”、すなわち封建社会におけ

る女性の抑圧によって理由づけるだけでは不十分であるとする。坂元氏は貴賤の区分、風俗の保持、婚姻に有利、などの意義を加えた上で、“ジェンダー・イデオロギーがからむにはちがいないものの、それでも完全に受動的でしかなかったともまたいえない”、“安定した生活を求めるために、またファッションとしても女性のほうから選択したという側面があった”と、女性の制限付きの主体性を指摘している³⁾。

纏足の施術者は常に女性であった(後述)。技術と経験が求められ、その成果の評価も明白な纏足づくりが花形商売とならなかったのは、一見不思議なようで当然である。なぜなら裸足の纏足は夫にも閨房でしかほどいて見せないほど、男性には秘められるべきものであったからだ。

本稿では、纏足が女自身の手で作られ続けてきたという面に着目し、纏足におけるジェンダー・イデオロギーと女性の主体性について考察してみたい。纏足の一般的な施術法は知られているが、いざ当事者の、つまり女性の証言となると資料が非常に乏しいため、実録と小説とを同列に用いている。用いた小説はいずれも男性作家が書いたものであるから、かえって典型的、類型的な施術者の像が描かれているものとして扱う。

1. 母

纏足の施術者は、多くの場合纏足される娘の母か祖母など親戚の女性であった⁴⁾。母親が娘の縁談のためと思い、痛がる娘に涙ながらに纏足を施す、そういう図式がたやすく想像できる⁵⁾。

馮驥才の小説『三寸金蓮』では、ヒロイン^{か こうれん}戈香蓮は幼くして父母をなくし、やさしい祖母に育てられている。香蓮が七歳のある日から、祖母は突如鬼のように無慈悲に香蓮の足の骨を脱臼させて固定し、傷つけて腐らせ、纏足を施す。成長して見事な纏足を持った香蓮が良家に嫁ぐ日、祖母は“纏足をしたことでおまえはずいぶんわしを憎いと思ったろうねえ”“これはおまえのかあさんが、死に際にわしに頼んだことじゃったんだ”と打ち明け、香蓮も“おばあちゃんは、あたしをかわいいと思っていたからこそきびしくしたことだったのよ。”⁶⁾と涙ながらに感謝する。

この祖母の描写は、想像される典型的な施術者の像であろう。すなわち、本当は愛情深い女であるからこそ、娘の将来のために鬼となる。この暴力を正当化するのには祖母に託された母性愛である。

しかし纏足の施術の場は、このような母／代理母と娘との、半ば甘美な共犯関係ばかりではなかった。

自分が纏足をされなかったこと、あるいは自分の纏足の大きさに不満を持つ母こそ、確信をもって娘に纏足したらしい。次に挙げる“母”は、自らは自然に発育した足であったために支配者階級である満族や漢族ではなく、少数民族の夫に嫁ぐしかなかった。夫の反対で纏足させられなかった長女は二十歳過ぎても結婚できず、母は次女には断固として纏足を決行する。

「……こんどこそ李艶の纏足は、誰がなんと云おうと、おらは性根を据えてかかっているんだ！」

それはせめて子どもの一人でも、自分が経てきた惨めさからのがれさせてやりたい、母としての一途な気持ちからであった——⁷⁾

また次に挙げる“母”、『三寸金蓮』に登場する白金宝は、婚家で開催される嫁たちの“美足コンテスト”で負け続けている女である。

〔初めて纏足されている自分の娘を見ながら〕白金宝は逆に一滴の涙すら流さず、花のような顔には笑みすらみせ、ときどき杏児や花児〔ともに女中〕から縛り布を奪い取り、力をこめて引っ張りあげ、おのれの仇を子どもに討たせようという意気込みです⁸⁾。

夫や舅姑から美しい纏足を持たないことをなじられてきた女は、娘の足に復讐をこめて再起を賭けるのである。

そもそも父権制下においては、娘が生まれた段階で母はすでに敗者であった。娘の纏足を作るのは、婚家における自分の地位を挽回する機会なのである。

娘は大声で泣き出した。……

母親も娘を慰めない。とうにそんな泣き声は聞き慣れている。彼女は娘のこのような泣き声に本能的な渴望さえ持っている。彼女は泣き声の中に母親たる栄誉を味わっている。なぜなら、それは彼女がまた一人纏足の娘を持った証であり、こうして彼女はきっと人も羨む“三寸金蓮”を持てるに違いないのだから。彼女は娘を産み育てた悔しさを、すべてこの儀式になげうつのだ（“……”は星野略、以下同じ）⁹⁾。

母は父権制に課せられた役目を果たさなければならない。夫、舅姑、そして世間から“人でなし、怠惰、娘のためを思わないなどと罵られ”たり、“娘の足

が大きいから、ドタバタ音を立てて歩くのが耳障りだと罵られる”¹⁰⁾のに比べれば、娘の悲鳴を聞き流す方がはるかに楽だった。

自ら纏足をされてきた母は、自分が耐えられたことだからと自信をもって手を下した。泣き叫ぶ娘を自分に引き比べ、胸を痛めるどころか情けなく思う母もいた。

あんたは何泣いているの、殴りもしかりもしていないのに、私も人間だけど、私が纏足したときには、あんたみたいに泣かなかったよ¹¹⁾。

娘の泣き声が大きいほど聞き分けのない娘に育てたという罪を感じ、母は娘の足をさらに締め付けたのであろう。

母に娘に対する纏足を止めさせるのは、娘の悲鳴ではなく、家長あるいはそれに類する立場の男性の意見である。纏足をしないことが主流となってもなお、多くの母たちは一時的な流行ではないかと迷いながら纏足を娘にほどこし続けたが、夫の一声があれば止められた。

楊趙氏は夫に尋ねた。“娘たちに足をほどこせてもいいかい。”夫は答えた。“足をほどこいた女は日に日に増えている。娘たちがしたくないと言うなら、ほどこせるがいい。他の娘たちが嫁に行けるなら、うちの娘たちも嫁げるだろう”¹²⁾。

張幼儀（1900-86、実業家）は三歳の時、三寸の纏足を持つ母と大足の乳母から纏足されられたが、数日で次兄の張君励（1887-1969、政治家）がその泣き声に耐えかねて、止めに入った¹³⁾。母は張幼儀の結婚を心配したが、当時一五歳にして中等学校で教鞭をとる知識人であった張君励は、纏足はもはや時代遅れであるし、幼儀が結婚できなかつたら自分が面倒をみるからと、止めるよう主張した。娘が結婚できなくてもよいという保証があつてはじめて、母は纏足を止めることを承知したのである。

母としての理想に添えないという罪の意識が子どもへの暴力へ向かうのは、今日でも珍しいことではない。まして纏足という女の子への暴力は正当化されていた。母親は本来自分を無力にさせている社会が自分に与えた“母親業”¹⁴⁾という権限をふるい、代々娘の足で自分の仇をとろうとして来たとはいえまいか。下見隆雄氏は、儒教社会においては“女性の持つ母性に男性が支援守護されることを基本的な理念とし、男尊女卑を形式的社会通念として、維持運営されてきた”という見解を示している¹⁵⁾。纏足もまた、父権制社会に期待される

ところの母性により維持されてきたのである。

2.“纏足婆”

纏足の施術には、下女が当たる場合もあった。

『三寸金連』には纏足を施す名人、潘ばあやが登場する。潘ばあやは若いときに当家へ正妻付きの女中としてやってきて、類まれな小脚であった正妻の纏足の世話をしていた。潘ばあや自らも見事な纏足をもっていたため、纏足を偏愛する主人のお手つきとなったが、妻の死後も妾という身分には昇格しないまま、家中の纏足関係の用事を仕切っていた。女たちは、当家で開かれる足コンテストが近くなると潘ばあやにおもねり勝ちを狙う。

次にあげるくぐり、潘ばあやが嫁入りして間もない戈香蓮の足に魅入られ、その足の世話を引き受ける場面である。

「この足がわしにもあったなら、倭家はわしの物になったじゃろうて！」……
「この足、わしにいただけませんかね。この足さえあれば倭家で何はばかることはありませんからな」……「わしはあなたを助ける気はさらさらありません。あなたはあなた自身のため、わしはわし自身のためにすればよいのです。あなたのその足がおたがいの役に立つのであって、だれかれにありがたく思うことなどありません。」¹⁶⁾

潘ばあやは見事な纏足を持っていたが醜女であったためか、正妻や女主人への道をはばまれた。そこで彼女は仕える家で一番小さな足の女に目を付けては、その纏足を維持し美しく飾ることに尽力してきた。“あなたはあなた自身のため、わしはわし自身のため”という言葉から、その最も小脚の女が当家で権勢を得れば、潘ばあや自身も優遇されてきたことが推測される。

次に実在の“纏足婆”の証言がある¹⁷⁾。彼女自身は母が早世したために大足であり、“正常な女としての見かけを失い”、蔑まれ、結婚できなかった。彼女は下女として十六、七才から人に纏足を施すようになった。はじめは自分で手を下すに忍びない母親が彼女に頼んだらしい。

母親によっては心が弱くて、膿や血を見るとこわがって手を出そうとしない。私は彼女たちと違って縛り慣れて膿や血もたくさん見てきているから少しも恐くない。私は手が出せるし、固くぴったりと縛れた。縛っているとき、娘達は悪鬼に命を取られるかのようにわめいたが私は気にしなかった。……私はきっちり縛

れるが、他の人ののはよくゆがんでいる。私のつくった纏足は一生きちんとしていて、ゆがんだり曲がったりしたためしがない。聞いてみるがいい、私が包んだ脚はみんな小饅頭脚で、端正で、丸くてしっかりし、小さくて尖っている。

間もなくその手腕が知られると、彼女は朝のうちに七、八対の纏足をまき直したというから、潘ばあやのように一つの家付きの纏足婆にはならず、何世帯か掛け持ちで世話したらしい。纏足の完成には五年ほどかかることと、纏足が全廃された時期と彼女の年齢とを考えあわせれば、彼女は生涯に18~20組の纏足を手がけたことになるという。彼女は手早く、正確に纏足を作って親には感謝されたであろうが、村の娘たちは彼女を憎み、さげすみ、“白目を剥いて唾をはき、石を投げた”。しかし彼女は娘たちに憎まれるほどに纏足する手に力をこめ、“私の恐ろしさを思い知らせてやろうと思った”。

纏足婆には技術もさることながら、娘をおさえつける腕力と、泣き声叫び声に動じない精神的な強靱さあるいは無神経さが、一般に必要なであったろう。纏足婆をやとったものの纏足される娘が大暴れし、“手当たり次第に纏足婆を平手打ちし、鼻を引っかき、髪を引っ張った”ため、きちんと縛れないまま施術を続けた結果、足が“凸凹した肉のかたまり”となってしまった例もある¹⁸⁾。しかし先の纏足婆の言葉より、彼女は自分を正常な女として扱わない世間への恨み辛みを込めて、娘たちの足をぎりぎり締め付けていたように思えてならない。

纏足婆には父権制によりサディストたる権利を与えられているが、その権利には美しい纏足を完成させるという制限があり、痛めつけるほどに称揚されるのは纏足婆ではなく痛みに耐えた娘の方である。纏足婆が美しい纏足を作り、その纏足をもつ娘がいかに華々しく嫁入りしても、纏足婆はそれなりの報酬が得られるだけで憎まれ、恐れられる。その意味で、纏足婆の立場にはサディスト的イロニーがある¹⁹⁾。母たちは纏足婆を介することによって娘の悲鳴から逃れ、娘の憎しみを回避することが出来た。さげすまれながらも恐れられ、必要とされると同時に卑しまれ、その力なしには育たないものが一人前になると用済みになってしまう。その意味で、纏足婆には父権下の女のありようが凝縮されていよう。

3. 娘

ごく稀ではあろうが、本人が自分の足を纏足したという例もある。

女の子が一、二歳のころからすでに、纏足への念入りな導入は、多かれ少なかれどこでも行われたであろう²⁰⁾。まず二、三年もかけて家中、ひいては村中で大足は恐ろしい、足が小さいほどよいお婿さんにありつけると歌などで幼女の頭にたたきこむ。それが功を奏して、殊勝な娘ならば四、五歳で“お母さん、纏足して、私もう大きいから”ということもある。すると母親はいくらか気が楽になる。

そうして育ちながら、母親を亡くし継母が纏足をしてくれなかったある娘は、自分で七歳から一二才にかけて纏足を作ったのである²¹⁾。隣家で母に纏足されて泣き叫ぶ娘を羨みながら、彼女は肉を腐らせるために自ら爪で足に傷を付けて巻き、体が痙攣するほどの痛みを耐えた。“彼女にはだだをこねたり暴れたりする権利がなく、ただ自分を自分に服従させ、自分で自分を管理し、自分を罰し自分を励ますしかなかった”。彼女の辛抱と執念の甲斐あって纏足は見事に完成したため、村中の母親は、彼女を引き合いに出して纏足する娘を激励した。

逆に、三、四歳の幼女では無理であったろうが、七歳以上ともなれば自分で纏足されるのを阻止できた可能性が高い。何香凝（1878-1972、革命家、のちに政治家）は、纏足されても毎晩はさみで纏足布を切ってしまい、はさみを取りあげられるとまた買ってきて隠し、家族が寝静まったころ切り、とうとう母親が纏足を諦めたという²²⁾。社会的に強いられてはいるものの、纏足を受け入れるか否かは自分である程度選択出来たのである。

自ら纏足した女性には典型的に、また纏足を他人に施された娘たちにも纏足の存続要因の一つ、マゾヒズムが見られると思われる。ただし筆者は、女が生物学的に生まれながらにして服従性とマゾヒズムを有しているという、フロイトの主張を受けているのではない。カレン・ホーナイがフロイトを修正した“本質的に脅威に満ちた環境におかれた個人の防御機能——社会のなかの敵対的な執行者（親とか支配者とか権威者とか）の支配をはぐらかそうとする戦略——としてのマゾヒズム”、すなわち与えられた社会文化環境での生き残り手段としてのマゾヒズムが、纏足の存続を助けたと思われる²³⁾。

4．結び

纏足によって男好みの女となり、美しいと言われ、良家へ嫁ぐことになったとき、女は確かに幸せを感じたであろう。しかし、極小の足を持つ女とは、中国社会が女に要請した男の理想である。そうである以上、纏足が女にもたらす

幸せとは、実のところ“自分のではない欲望へ自分の体を売り渡すマゾヒスト的売春”²⁴⁾によって得たものである。その証拠に、纏足の時代の女は男に依存せずには生きられない状態におかれ続けた。

纏足の苦痛は結婚後の快樂を約束した。纏足は女性にとって、父権制社会に戦略的に対処するための選択肢であった。その意味でならば、纏足女性はマゾヒストであったと言ってもよいだろう。自我を殺すよう社会から要求されれば、人はサディズム／マゾヒズムにふけりやすい。同様に、社会から要求されれば、女は容易にサディストになりえた。これもまた父権制社会で醜くいやしいと蔑まれた大足の女たちが、あるいは夫と舅姑に虐げられた母たちが生き抜く戦略であったろう。

良い母親ならば娘に纏足をほどこすべきだという父権制の圧力、もしくは、良家に嫁がせることで不遇であった自分の仇を討ちたいという思いが、母に娘を纏足させた。つまり母は娘自身のためだからと娘に痛みを与えた。娘は母に感謝したのだろうか。纏足のおかげで裕福な婚家で優雅に暮らせば、足を折られ腐らせられた、場合によっては命に関わるほど激しい痛みの記憶は相殺されたろうか。やはり、母に対する否定的な記憶が残ったことは否めない。さらに自ら母親となったとき、娘は母が自分に纏足をしたのは、実は母自身を父権制社会の中で守るためだったと気付いたことだろう。“自分が闘うためにはまず愛され、自分のために闘ってもらったという経験が必要”²⁵⁾である。纏足された娘は、母に怒りを抱きつつも、闘うことなくまたその娘を連鎖に巻き込んでいった。

纏足は制度化された母性に支えられた。同時に纏足は、婦徳、美醜といった父権制において女を階級づける範疇の一つであり、女たちは纏足をめぐって反目し、罪の意識、怒り、嫉妬、憎悪をぶつけ合ってきた²⁶⁾。纏足は母 - 娘、美しいとされる女 - 醜いとされる女の連帯をはばみ、恨みを利用することで維持されてきたと言えるのではなかろうか。

注

- 1) 楊楊 2001、pp.35-36
- 2) エロティックなアプローチとしては岡本隆三 1999、ロッシ「東洋の足の性愛」(ロッシ 1999)、近代史との関連では夏暁紅「晚清婦女生活中的新因素」(夏暁紅 1995)、コー1997、坂元ひろ子 2000などを念頭に置いている。
- 3) 坂元ひろ子 2000、p.149。
- 4) 岡本隆三 1999に“母親か親戚の夫人が多く、下女の場合もあり、いわばしろうとが施術に当たった。”と述べる(p.16)。
- 5) 劉士聖／劉揚 1999は纏足が急激に普及した明代について“当時娘のある家ではみな纏足をさせ、母親は娘を愛すれば愛するほど娘のために纏足を憎んだ。”と述べる(p.342)。
- 6) 馮驥才 1989、p.47-48。翻訳は納村公子訳による。
- 7) 石塚喜久三 1943、p.259。
- 8) 馮驥才 1989p.217。
- 9) 楊楊 2001、p.63。
- 10) 楊楊 2001、p.122。
- 11) 楊楊 2001、p.64。
- 12) 楊楊 2001、p.122。
- 13) Chang1996、p.23。なお張幼儀は、奔放な詩人として名を馳せた徐志摩(1897-1931)と親の段取りで結婚し二男をもうけたが、七年後夫からほぼ一方的に離婚された。徐志摩の両親は離婚された女性の立場を考慮して彼女を養女としたが、幼儀はドイツに留学し、実業家として自立した。後に兄・張君勱は米国で彼女とともに暮らした。
- 14) “無力な女たちはいつも、自分の人間としての意志に力を持たせ、社会が自分たちに背負わせてきたものをそこに返す手段として、母親業を使ってきた。それはか細い手段だが、深く根を張っている。”(リッチ 1976、p.53)
- 15) 下見隆雄 1994、p.21。
- 16) 馮驥才 1989p.106、p.108。
- 17) 楊楊 2001、pp.105-108。
- 18) 楊楊 2001、p.123。
- 19) “サディストは、その犠牲者たるものの自我以外には自我を持たない。”“サディスト的イロニーとは、次のようなものをいうのである。つまり、サディストがみずからの分解した自我を必然的に外部へと投射し、同時に外部なるものを唯一の自我として生きる手段たる、二重の操作をいうのである。”(ドゥルーズ 1967、p.152)。

- 20) 楊楊 2001、pp.58-59 に、昆明の六一村における纏足への導入について記されている。
- 21) 楊楊 2001、pp.103-105。
- 22) 廖夢醒 1973、p.2。なお、後に成人した何香凝の自然のままの足を、米国で育った廖仲愷（1877-1925、革命家、政治家）は好ましく思い、二人は結婚した。
- 23) ノイズ 1997、p.281。ノイズは、一般的なマゾヒズムに即して、“マゾヒストが求めるのは、殴られ侮辱される空想を演じることが出来る、コントロールされたシナリオである。……マゾヒストは、殴る人物が、ゲームのルールを心得ていること、止め時を心得ていることを確かめる”と述べ、女性のマゾヒズムについては、それが社会文化的環境への適応であるとするカレン・ホーナイ（精神分析学者にしてフェミニスト）の論に賛同し、“自分がコントロールしているというだけで、そのシナリオはマゾヒストにとっては自分を守るのに役立つのである。”とまとめている（ノイズ 1997、p.12、p.287）。
- 24) イリガライ 1977 p.26。ノイズ 1997 はカレン・ホーナイの女性マゾヒズムの主張につながるものとして p.280 に引用している。
- 25) リッチ 1976、p.348。引用に関連して、リッチは次のように述べている。“多くの娘達が、母親は‘何があっても’すぐに、そのまま言われる通りにうけとめてきたという怒りを激しく感じている。……伝統的な‘纏足’をした中国の女のように、そういう母親は自分の悩みをそのまま娘に伝える。母親の自己嫌悪や希望の低さは、娘の精神にとって、‘纏足’のボロ布だ。”（p.347）
- 26) ミレット 1970 は、“父権制における階級の主な作用の一つは、女を互いに反目させること”であり、男性は、ダブル・スタンダードの多様な利点につけ込んでこの両方の世界に関与し、優越した社会的、経済的手段を利用して、この二種類の女達を互いに張り合わせる。”（p.92）この階級づけの範疇として、ミレットは婦徳、美醜、年齢を挙げる。

参考文献

- 石塚喜久三 1943「纏足の頃」、黒川創編 1996『満州・内蒙古/樺太 “外地”の日本文学選』新宿書房
- イリガライ、リュース 1977『ひとつではない女の性』棚沢直子/小野ゆりこ/中嶋公子訳 1987、勁草書房
- 岡本隆三 1999『纏足物語』東方書店（1963年弘文堂から出版された『纏足』を一部割愛、図版を加えたもの）
- 夏曉紅 1995『晚清文人婦女観』作家出版社
- コー、ドロシー 1997「中国・明末清初における纏足と文明化過程」秦和子訳、アジア女性史国際シンポジウム実行委員会編『アジア女性史——比較史の試み』明石書店、1997年
- 坂元ひろ子 2000「足のディスコース——纏足・天足・国恥」『思想』907号、岩波書店
- 下見隆雄 1994『儒教社会と母性——母性の威力の観点でみる漢魏晋中国女性史』研文出版
- Pang-Mei Natasha Chang 1996 Bound Feet and Western Dress Doubleday New York
- ドゥルーズ、ジル 1967『マゾッホとサド』蓮實重彦訳 1972、晶文社
- ノイズ、ジョン・K 1997『マゾヒズムの発明』岸田秀/加藤健司訳 2002、青土社
- 馮驥才 1987『^{てんそくものがたり}三寸金蓮』納村公子訳 1989、亜紀書房
- ミレット、ケイト 1970『性の政治学』藤枝濤子/横山貞子/加地永都子/滝沢海南子訳 1985、ドメス出版
- リッチ、アドリエンヌ 1976『女から生まれる』高橋茅香子訳 1990、晶文社
- 廖夢醒 1973『我的母親何香凝』香港朝陽出版社
- ロッシ、ウィリアム・A 1993『エロチックな足——足と靴の文化誌』山内昶監訳、西川隆・山内彰訳 1999、筑摩書房
- 楊楊 2001『小脚舞踏——滇南一個郷村的纏足故事』安徽文芸出版社
- 劉士聖/劉揚 1999『中国婦女通史』青島出版社